

NYに森村あり

中部地方には、ノリタケカンパニーリミテドや日本ガイシ、日本特殊陶業など日本を代表するセラミック産業が集まっている。九州に本拠を置くOTTOも加えた企業群は森村グループと呼ばれる。その創始者は開国直後の明治初期にいち早く貿易を志した東京の商人、森村市左衛門だ。「時流の先へ 中部財界ものがたり」第六部では、日本の陶磁器産業をけん引する森村グループの成長を描く。



中部財界ものがたり

カメラをぶら下げた中国人観光客や、スーツ姿の白人らが行き交う。歩道には黒人の露店が並び、「人種のるつぼ」そのものの光景が広がる。米ニューヨーク有数の繁華街・ブロードウェイ通り。「541」と番地が書かれた灰色のビルの一階には、ワニのマークで有名なスポーツブランド「ラコステ」が入る。今年一月二十七日、記者が重いドアを引いて中に入ると、ピンクや黄色など色鮮やかなポロシャツが飾られ、若者でにぎわっていた。

一八八四(明治十七)年から六年間、541番地には「森村ブラザーズ」という日本人兄弟が開いた店があった。骨太の柱で三つに区切られた真ん中が出入り口、その両脇にシヨウウィンドーという造りは、百三十年近い時を経ても変わらない。店主は小柄な体に口ひげを生やした森村豊。兄の市左衛門が日本から輸出した古美術品や陶磁器、ちようちんが並んだ。

グループの起源をたどり、541番地を訪れたことがあるノリタケカンパニ

第6部 陶磁器を世界へ <1>

リミテド元専務の鈴木啓志(ハシ)は「露店などが出ていて思ったより雰囲気がよくない。こんなところで苦勞してやっていたんだな、としみじみ思った」と語る。

ラコステで買い物をしていた洋服店員のタニエル・オコネル(ニ)は「ここで日本人が商売をしていたなんて初めて聞いた。そんな昔に、すごい精神だと驚く。

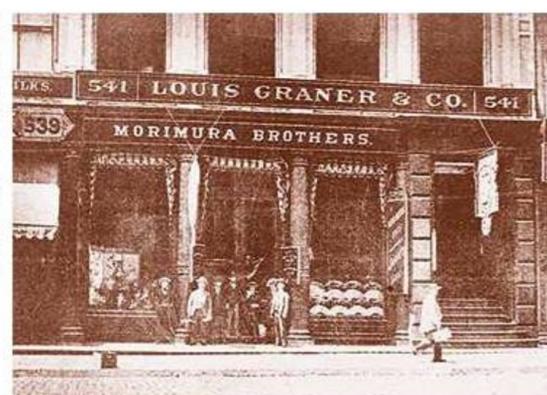
森村兄弟が貿易の道を歩み始めたのは江戸末期の一



八六六(慶応二年)年。鎖国を解いた幕府が海外渡航を許可したことで、市左衛門は二十六歳、豊はわずか十二歳だった。貿易を通じて

国を豊かにすることを目指した市左衛門。すでに妻を連れて海外に行けない自分分は国内にとどまることにし、英語を学ぶよう豊に頼んだ。

この時のやりとりは市左衛門の言葉を残した「森村



⑤米ニューヨークのブロードウェイ通り541番地に開店した森村ブラザーズ=ノリタケカンパニーリミテド提供(撮影年は不明)
⑥森村ブラザーズがあった場所には、衣料品店「ラコステ」が入り、若者でにぎわう=2013年1月27日、米ニューヨークで、石井宏樹撮影

兄弟のきざずな海を渡る



ニューヨークで業績を拡大していた1889年に撮影された森村市左衛門(右)と豊の兄弟=森村商事提供

ズ」を開き、541番地などニューヨーク各地で商売をした。

「言行録」によると、米国内での商売は好調だった。東京にとどまった市左衛門が日本国内で三円で仕入れた花瓶が、米国では三十ドル(当時の三十円)で飛ぶように売れる。「米国の商売は大いに見込みがある」。

兄弟は確信する。

翁言行録」に詳しい。

「私には学問がない。国家のためだから書生をしなからでも学問をしてくれな

い。市左衛門の頼みに、豊はきっぱり言う。「兄さんが国家のためと言

市左衛門は東京・銀座で

洋服店を営みながら渡航費用の三千元(現在の三千万四千万円)をため、七六年に豊と洋服店の上に貿易会社「森村組」(現森村商事)を立ち上げる。二年後、太平洋を渡った二十四歳の豊は「森村ブラザー



ただ、森村商事の社史などによると、資金が乏しい中で豊は厳しい暮らしを強いられる。自ら荷車を引いて商品を受け取り、夜は荷ほどきをした後の箱をつないでその上に毛布をかぶって寝る。食事もパンと牛肉をストープで焼くだけ。日本人はニューヨークに数十人しかおらず、豊が腹痛で救急病院へ運ばれても医者が見てくれないなど、東洋人への差別も強かった。

ノリタケ元専務の鈴木は「車も電話もなく人種差別もあった中での商売は大変な苦勞があった」と思いやる。

森村ブラザーズを支えた豊は、九九年に胃がんのため四十五歳の若さで亡くなる。市左衛門は後に「彼は私の弟だが、事業の面では兄と違って、森村組は十二歳の時の弟の決心でできた」と振り返る。市左衛門のひ孫で東京に住む森村登代子(ハシ)は「創業者たちの強い関係が今の森村グループをつくった」と振り返る。森村兄弟のきざずが新しい時代の貿易の道を切り開いた。(文中敬称略)

森村グループ 1876年に森村市左衛門、豊の兄弟が東京・銀座で始めた貿易会社「森村組」(現森村商事)から発展したセラミック分野の世界的な企業グループ。市左衛門や親戚の大倉孫兵衛、和親親子らが中心となって、1904年に日本陶器(今は洋食器のノリタケカンパニーリミテド、名古屋市)を設立。17年に日本陶器の衛生陶器部門が分社化して東洋陶器(現OTTO、北九州市)となり、19年に碍子(がいし)部門が日本碍子

(今は電力用碍子の日本ガイシ、名古屋市)として独立。36年に日本碍子から点火プラグ部門が分かれ、日本特殊陶業(名古屋)が誕生した。また19年に、大倉親子は高級洋食器メーカーとして大倉陶園(横浜市)を設立した。相次ぐ分社化は、緊張感のある独立経営を求めた市左衛門らの「一業一社」の精神に基づいた体制を自主的に解消。現在はグループ各社間で多くて数%の株式を持ち合う程度の資本関係しかない。